



Title	藤井竹外略傳
Author(s)	北村, 學
Citation	懷德. 1969, 40, p. 56-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90474
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤井竹外略傳

北村學

一

藤井竹外は攝津高槻の人である。「絶句竹外」の名があるように、七絶の一體で、江戸末期、一世を風靡した。代表的な詩集に「竹外二十八字詩」、他に「竹外亭百絶」などがある。また、その作は「安政三十二家絶句」には一九首、「文久二十六家絶句」には三三首とられている。

竹外を有名にしたのは、いうまでもなく「吉野三絶」の一つに數えられる次の詩で、

古陵松柏吼_ニ天鷲_一 山寺尋_レ春春寂寥

眉雪老僧時輟_レ帚 落花深處説_ニ南朝_一

右については、貫名海屋が「雖_レ厠_ニ之唐賢中_一誰能辯_レ之」といっているように、りっぱに中國の詩でおる。廣瀬淡窓はこれを唐の王建（一説には元稹の作ともいう。）の「行宮」の五絶に比して、「白頭宮女在、閑座説_ニ玄宗_一、

未_レ及_ニ此句格韻双絶_一と斷じ、草場船山は「士開（竹外）以_ニ此句_一得_レ名、宜_ニ稱爲_ニ藤落花_一」といい、清人胡震（小蘋）は「誠如_ニ諸君謂_一有_ニ唐音_一確乎不_レ謬」と評する。まさに格調すぐれ、情景そなわった詩といえよう。

こうした詩をものした人でありながら、その傳は從來あまり知られていない。わずかに、「三島郡の史跡と名勝」・「高槻通史」の冊子に、舊制浪高の故天坊幸彦教授の紹介が見えるのみで、それもまた簡略である。

最近、舊高槻藩の家老内藤氏の出である北本好武氏によって、藤井家のことが、相當明らかにせられた。まず、それを抜き書きしよう。

藤井家は姓は藤原、小山兵衛尉朝政の後胤と傳えられる。鬼の抱柏をもつて家紋とした。小山朝政は下野の人、いわゆる天慶の亂、常陸に於て反亂を起した平將門を討平げた下野押領使のち鎮守府將軍藤原秀郷の後裔である。

また、

貞綱（竹外の父）は享保三年（一八〇三）一月、二十歳で小姓役として召し出されて以来嘉永七年（一八五四）十一月二十五日（二十七日安政と改元）七十一歳で死ぬまで五十年餘りの長い間、役職にあった。それだけ中々の人物であつたらしい。預所（幕府天領）の頭取を勤め、のちには用人兼郡奉行の要職をも勤めた。天保十一年（一八四〇）、貞綱は功によつて三十石を加増され、藤井家の家祿は都合百五十石となつた。

とある。

ちなみに、右に見える貞綱は、嘉永四年（一八五二）六十八歳で、なお用人の現職にあつたという。竹外は當時すでに四十五歳に達していたことから推すと、竹外自らは、いわばのんきな勤めではなかつたかと思われる。（大體、竹外は文政八年（一八二五）一月、十八歳で小姓役に召し出されているが、その後の役向きは明らかでないのである。）これが、むしろ竹外の詩作に幸いしたのであらう。ずいぶん方々へ吟行している。

その居所の關係から（後には京に移り住むが）東山・嵐山・伏見・巨椋池・保津峽・鞍馬・樺尾・攝河泉の近邊はもとより、比叡山も頂上をきわめているし、近江では

鹿跳谷・永源寺、大和では奈良・月瀬・吉野、江戸勤役のついでもあつて、美濃では養老瀧も二度訪れている。關原や富士も詠じ、觀音崎にも足をのびしたのではないかと思われる。江戸では上野・金杉・亀戸・佃島・梅屋敷と有名な所はへめぐり、詩囊を肥やしている。

なお、河野鐵兜あての書簡には、長男貞臣と肥後から筑後を旅する趣のものもある。（これに關した詩が残っていないので、それを果たしたのかどうか明らかでない。）

二

竹外は、文化四年（一八〇七）四月二十日、城内三の丸にあつた役宅で生まれた。（後に屋敷替があつて、今の高槻市民會館の前庭のあたりに移つたらしい。）名は啓、字は士開、また強哉、通稱は啓二郎、啓次郎、啓治郎、いずれの文字も用いている。（「二郎」とはあつても、長男）また、書簡には「吉郎」もある。別號は雨香、小廣寒宮主人ともいう。夫人の名は「せい」、福山氏の女で、二男三女をもうけた。

元來、山陽の弟子であるが、山陽の没後は星巖に師事した。

飄々たる性格で、風雅に徹し、詩酒に日を送った。よむところは、風物、人情に關するものが多く、時事につ

いてはまれである。といつても、時事に眼をふさいでいたのではなく、大鹽の亂の際には、浪華に火の手の上がるのを望んで、ただちに、それを斷じたと、江木鰐水は「二十八字詩」の序に記している。(もつとも、大鹽平八郎は、高槻の菁莪堂にも出講していたので、そのひととなりを知悉し、豫見するところがあったのだらう。)

弘化二年(一八四五)「竹外亭百絶」を出し、嘉永七年(一八五四)に「竹外二十八字詩」を編んでいる。

萬延二年(一八六一)致仕し、翌文久二年九月には京三本木に居を定め、慶應三年(一八六七)七月二十一日、數え年六十歳で没する。菩提所は高槻北山の乾性寺で、この墓は後に大本行寺に移される。撰文は頼支峰の手になり、碑面には「竹外藤井先生之墓」と刻まれている。(なお、乾性寺の方には、曾孫によって五輪塔婆が建てられ、法名は「二枝院竹外日開居士」とある。)別に、京東山長樂寺の山陽の墓のかたわらに、「竹外醉士」とのみしるした自然石のものがある。ここには、遺髪と印章を納めたりしい。

門下では、「春帆樓百絶」の高階春帆、「錦洞小稿」の市村水香などが、名を成した。

竹外のひととなりについて、森田節齋は「二十八字詩」の序に「疎放嗜酒」と記している。竹外の強酒劇

飲、談論風發の面を強調したものと思われる。また、意に合えば「妙」と大呼する癖も述べてある。酔えばはだして緑の草を踏んだことは、自注「中澤生寒巖居」の詩の「許吾赤脚踏青苔」の句下)に見える。

逸話について、なお抄出すれば、

竹外が江戸勤番中、次のような話があった。江戸の藩邸付近の路上にて、ある日地圖を廣げて何か探している一人の武家があつたのを、折柄通りあわせした同藩士某が近づくと、それは竹外であつた。近よつて理由を問うたところ、竹外は顔をあげて安堵の色をうかべ、「實は他出しての歸途、藩邸への道が判らぬため、探しているところござる」との答え、某は思わず噴き出して、「藩邸はこれござる」と指さされてみれば、あにはからんや藩邸前であつたという。

また、

東三ノ丸の佐藤家(「二十八字詩」にも佐藤精一の名が見える。)へは、しばしば訪れ深更まで歓談した竹外が、佐藤家の紋の入つた提灯を借りうけ、歸宅途中、はからずも名句が浮んだため、傍らの屋敷の堀に提灯をつりかけ、詩作に没頭し、そのまま忘れて歸つた。夜が明けると思わぬ所に佐藤家の提灯がか

かつていたということは一再ならずあつたという。

とある。これらは、いずれも詩に打ち込み、俗事を念頭におかなかつたことを物語る。

竹外は、その飄逸な人がらで、周囲から愛され親しまれたようで、「二十八字詩」にあらわれたところだけでも、その交友は實に百十數人に及んでいる。もとより儒家文人が多くを占めるが、おもなものに、池内陶所・江馬細香・江馬天江・宇田栗園・大沼枕山・小原鐵心・金本摩齋・日柳燕石・河野鐵兜・神山鳳陽・齋藤拙堂・鹽田隨齋・貫名海屋・廣瀬旭莊・廣瀬淡窓・松橋江城・宮原節庵・村瀬士錦・諸葛中如・矢上快雨・梁川紅蘭・賴鳴厓・賴支峰・賴立齋ら、佛家にも金谷上人・月性上人・古嶽上人・實惠上人・雪莊禪師・梅塢道人ら、畫人にも大倉笠山・野呂介石・日根對山・村田香谷らの名が見える。

三

竹外は酒豪であつたので、酒にちなむ詩も多い。

若い時分（天保の初め、二十三、四歳のころ）、鐵砲の名手として知られていて、酒席で、齋藤拙堂の問いに答えて、

神機奮發迅雷聲 耐可三丸當萬兵一

但令引來三大白 爲君赤手掣山鯨

とほほえましい豪語をし、「春晴獨歩到北林」の引には「予有脚疾服山内伯履藥、伯履痛禁酒、今日偶來花下、飲則破禁不飲則殺風景矣、聊放言以自遣、但恐伯履讀之認假爲眞也」とあつて、

第幾番風到早櫻 壚頭春酒十分聲

先生何事仰天笑 豈可花前我獨醒

と詠じたが、これについては、師の山陽も「婦人之言不_レ可_レ聽之」と、後藤松陰も「先生此時飲可_三八斗而醉」といつている。

江馬天江が、死の前日、見舞つた際にも、杯をかわしたことが、「二十八字詩」の序でうかがわれる。

その好物の酒を、江戸からの歸途、兩親のみやげに持つて歸る詩もある。「抵山崎中子篤候_ニ於途_ニ有_三瓢酒之贈_一賦謝」に、

興窓何幸得_三芳醇_一 涓滴不_レ須沾_三我唇_一

遊子囊中無_三一物_一 留_三將此味_一 獻_三双親_一

右の詩に關しては、海屋が「公之耽_レ飲類_ニ畢吏部_一（畢卓）、而興窓盡日忍_レ渴不_レ嘗_ニ一滴_一 歸獻_ニ之尊親_一、所謂純孝」と評している。

事實、孝心があつくて、「歸_レ家」に、

重侍_ニ膝前_一如_ニ夢寐_一 秋堂風露早涼初

連宵情話交悲喜、未有三工夫到讀書、
また、「奉_レ母遊_二天保山_一」に、

倚_レ舷洗_レ盞水生紋 喜見慈顏漸帶_二醺

一樣彩舟啣_レ尾去 無_二人不_レ解_二載_二紅裙_一

とある。

子にも愛情の深い人で、「春日田園」に、

種_二桃繞_二屋是吾家 樹樹樹頭團_二紅霞_一

（「團」は「文久二十六家」では「籠」）

嫁_二女西隣_一呼_レ可_レ答 隔_二花機杼響_二咿啞

「似_二女浦_一」に、

自_レ朝至_レ夕學_二彈箏_一 見汝十三絃尙生

出_レ谷黃鶯纔一囀 無_二人不_レ道_二是簪聲_一

「女柳計至」に、

客中得_レ計痛何如 花笑鶯嬌不_レ慰予

記汝垂髫能_レ傲_レ母 半旬前寄賀_二新書

また、「兒貞臣學_二書不_レ成、出遊_二筑後_一從_二加藤先生_一（加藤善右衛門）學_二槍三年_一矣、書_二此以寄_一」に、

每_レ思_二阿臣_一歎復歎 學_二槍難似_二學_二書難_一

（「臣」は「文久二十六家」では「貞」）

一針正直指南勢 早令_二鄉人刮_二目看_一

とある。

夫婦の間もなごやかであったようで、「中_二酒_一」に、

中酒今朝起更遲 如_レ愁如_レ夢又如_レ痴

山妻怪我偷失笑 想到唐賢落第時

「怪石」に、

人_三立階前_二喚欲_レ響 苔衣半破露_二稜稜_一

先生笑向_二妻兒_一語 是我平生耐久朋

とある。

師を敬慕する念も強く、江馬細香が訪れた時も「席上

出_二山陽先生遺墨_一相與披觀久之」に、

爐香一瓣竹風寒 滿寫遺詩墨未_レ乾

悲喜誰如君與_レ我 姓名並自_二卷中_一看

「同_二賴子剛_一（支峰）子常（立齋）大倉國寶（笠山）江馬信

成及細香袖蘭（國寶の妻）二女史_二遊_二東山_一、分_二開花落_一

地聽無_レ聲爲_レ韻余得_二落字_一」に、

十年吟社豈零落 結_二隊遊春殊不_レ惡

嶺寺看_レ花却引_レ愁 無_二人不_レ開_二口說_二長樂_一

「壬戌（文久二年）八_二八六_一」九月移_二家三樹里_一在_二賴先

生水西莊故址側_一書_二感_二一首_一」に、

認_二得孤亭_一起整_二巾_一 此心不_二說向_二傍人_一

依然山紫水明處 我喜移_二家恰作_二隣

往事悠悠嘆_二逝川_一

水聲依_二舊靜如_二絃

自_二從梁木_一摧_二後 不_レ漱_二此流_一三十年

また、「訪_二星巖先生於墨水_一」に、

葉似扁舟輕欲_レ颺 沙禽飛盡水茫茫

讀_レ騷高士家何處 兩岸春風杜若香

「雪夜」に、

桴_二柁爐邊坐_一夜分_二 奇寒銘_レ骨酒無_レ動

鏗然折竹有_レ聲處 雪沒星巖高士墳

とある。

交友の真情のあふれるものは、「聞_二矢上子聲_一（快雨）

北遊死_二糸魚河上_一」の、

誰人掃_レ地更燒_レ香 雪沒_二新墳_一二丈強

家有_二嬌兒啼_一竟_レ乳 未知北越在_二何方_一

（「在」は「文久二十六家」では「是」）

また、「十月廿九日福山士貫書達_二東山_一」曰二十八日東行

登_レ程、予知_二追_レ之不及_一及悵然書寄」の、

馬前不_レ得_レ唱_二陽關_一 此日接_二書_一双淚潜

風雨琵琶湖上路 知君回_レ首望_二東山_一

などがある。

竹外について特筆せねばならぬのは、竹を好む性であ

る。「二十八字詩」三九首中、竹に關するものは二二

首を數える。

隣家の薺氏に美竹が多くて、「夜聽_二隣園竹風_一」書_二三十二

八字_一」に、

一陣風來一陣鳴 虛檐夜靜見_二秋生_一

萬竿修竹非_二吾有_一 只領萬竿修竹聲

これが「竹外」の號のいわれでないかと思われる。由

來、竹は四君子の一でもあるので、「醉士」をもって任

じた竹外には、一種の謙辭でもあつたらう。この竹が、

嘉永元年（一八四八）江戸から歸つてくると、全部切り

拂われていたため、非常に落膽して、「哭_レ竹」六首を作

る。その一斑をあげれば、

惜君失_二却萬琅玕_一 無_二復清陰六月寒_一

贏得家童長免_レ課 不_レ須每日報_二平安_一

十年曾與_二竹爲_レ隣 今日無_レ由見_二此君_一

長記讀書人不_レ睡 秋聲才動最先聞

十年曾與_二竹爲_レ隣 今日無_レ由見_二此君_一

長記讀書人不_レ睡 秋聲才動最先聞

願_二地尋_レ君君不_レ見 併無_二一箇錦綸兒_一

欲_レ知双袖濕多少 恰似今春哭_二女時_一

右の詩について、廣瀬淡窓は「其事其詩一般奇絶、可_レ

入_二詩話_一」と、草場船山は「痛哭之情纏綿徘徊動_レ人、

足_二以證_一作者竹外亦竹魂詩魄矣」という。胡震は「哭

竹六首一氣呵成、痛讀一過、直欲_レ操_二斧爲_二平安君_一報_二

讎、竹乎竹乎、何不幸而遭_二此俗奴辣手_一乎」と述べてい

る。

やがて、二十丁ばかり離れた能因塚の竹を移し植える。すなわち「竹」に、

兩三竿竹小齋宜 遠自因公墓上移

紛披歷亂青鸞尾 曾帶清風拂斷碑

と見える。いかに竹を愛したかが、察せられる。

四

「絶句竹外」とはいっても、七絶以外の諸體を作らなかつたのではない。「二十八字詩」の末尾にも五絶二〇首が收められている。そのほか、「箕面山卽事」という七律が「箕山勝遊詩文集」の中に見える。また「竹外亭百絶」の篠崎小竹の序にも、「其所作古今諸體無不具焉、譬如梅林飛香遠邇、而其居固在淀江之濱、豈非江頭千樹春欲暗乎、今乃僅々拔百絶句於其中、實竹外之一枝耳」とある。

が、竹外自ら、諸體を含めぬ辯として、「長篇大作世皆稱先師壇上」、「僕才劣學淺不致效尤、惟七絶摭情摸景僕甚好之」といったことが、宮原節庵の序に記されている。たしかに一種の見識といわねばなるまい。こうして、その後半生は七絶のみの道を歩んだようである。結果、世に絶句だけを伝えることになった。それが集大成されたのが「竹外二十八詩」で、他に現存するものとし

ては、「二十八字詩」に入れなかつた「百」絶中の一首と、「文久二十六家絶句」に見える家里松嶠に關する二首とが、まずそのすべてといつてよからう。

しかも、その精選した七絶にも、常に彫琢の手を休めなかつた。淡窓は「一字不_レ安推敲不_レ措、往々至_レ廢人間慶弔」としている。前記の「百絶」から「二十八字詩」に收めた八六首の中、三八首についても字句を改め、（これに關連して、「安政三十二家絶句」にとられた一九首中一首のときは、再修正のあとも見える。）、「文久二十六家絶句」に選ばれた三三首についても、一首に筆を加える。したがって、「二十八字詩」の序に、小卷原齋が「酒是謫仙詩浪、偃」と、岡本黃石が「併得長江與翰苑」と詠じて、いずれも「賈島」に比しているのも、ゆえなしとはいえない。

こうした不斷の推敲が、竹外の詩を高からしめたわけである。胡震も、その詩を推稱し、しばしば、佳作・上乘・秀逸・秀雅・極佳・清俊・新俊・好詩・好句・雋句・才人・名手・好手・老匠・爲宋人佳句・勝於北宋・元人詩意不_レ能專美一等の語を與える。また、その連作（四首・六首・八首等）の法についても稱賛する。たとえば、「三月十七日公朔（板倉公朔）招同江馬正人（天江）山田其正（梅東）松橋野逸（江城）一東山賞花、予適在

京師「因亦與焉、得_二八絕句_一」の八詩を、「接咏八絕句讀來、一氣呵成而無_二重複熟套之病_一、各臻_二其妙_一、可_レ分可_レ合、如_レ花如_レ飾、如_二春蠶吐_一糸妙緒無_レ窮、眞乃生花之筆、餐蓮之舌、斯之謂_レ善_二於絕句_一」と評している。

竹外の詩には拗體變格のものも散見する。これらについて、頼鴨厓(三樹)は「二十八字詩」の序に、「頃士開示_二此集_一、其係_二變格_一者每_二一詩_一證_二引作例數十家_一、聲律奇變而不_レ亂、燦然猶_下抉_二雲霧_一見_二列星_一」と、一々もとづくところのあることを述べている。

古人の詩句を點化したものも多い。ずいぶん廣く詩書を讀んだらしく、「洛都要記」・「三柳軒雜識」・「酬世錦囊」などというものにも目を通してゐる。

胡震は竹外の詩風に關して「揆_二其平日所_一好大抵深_二白詩宋人近體_一」とする。竹外が白詩にひかれたことは、「白香山」の詩に、

巷女村童亦能唱 香山詩句皆和暢

知音畢竟屬_二誰人_一 後魏子孫唐宰相

と詠じたのも明らかであるが、竹外の作風は、まず晩唐、宋の「香」といってよからう。すべて、風物、人情、日常の一こまも微妙纖細に描かれ、しかも、時に絢爛豪華、時に悲愴痛切、あるいは脱俗清逸、あるいは諧謔明朗と變化に富み、また才氣にあふれている。

「竹外二十八字詩」は、珠玉の佳篇にみちみちたものと、いうべきであらう。